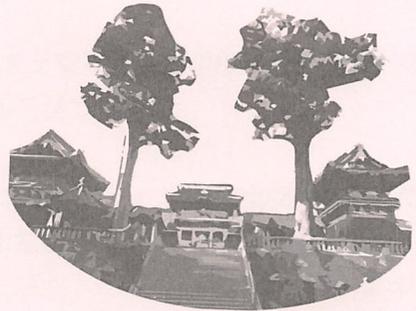


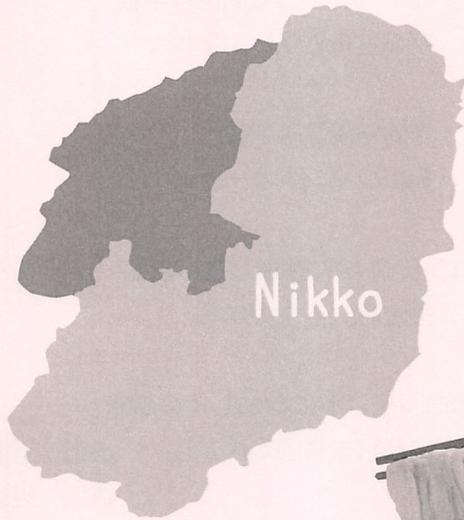
吹奏太郎



Nikkokisuge



Nikko Toshogu



Nikko



Kawasemi



Nikko bori

Yuba



Ashio Dozan



Kinugawa Onsen

目 次

★巻頭言	1
栃木県吹奏楽連盟副理事長 小川 光正	
★1 第24回 東関東小学生バンドフェスティバル（ステージ部門）に参加しての感想	1
益子町立益子小学校・真岡市立大内東小学校 梁木 智矢	
★2 第31回 東関東吹奏楽コンクールに参加しての感想	
中学校の部B部門 真岡市立真岡中学校 鯨 絢音	
中学校の部B部門 宇都宮大学共同教育学部附属中学校 伴 綸花	
高校生の部B部門 栃木県立小南城南高等学校 宇賀神莉心	
中学生の部A部門 宇都宮市立陽南中学校 片山 愛葉	
// 森下 円佳	
高校生の部A部門 作新学院高等学校 齋藤 心和	
職場・一般の部 矢板ウインドオーケストラ 岡田 徹	
★3 第31回 東関東マーチングコンテストに参加しての感想	4
A部門 壬生町立壬生中学校 吉川 宗快	
★4 第67回 栃木県アンサンブルコンテストに参加しての感想	6
中学生部門 宇都宮市立国本中学校 増田 誠明・君島 萌香	
// 吉沢 瑛太・菊地 美徳	
// 宇都宮市立田原中学校 猪瀬 誠心	
高等学校部門 栃木県立矢板東高等学校 武村 香	
大学部門 帝京大学宇都宮キャンパス吹奏楽同好会 梶谷 正行	
★編集後記	9
栃木県吹奏楽連盟広報部 今泉 剛	

「皆さんはなぜ、今の楽器を！??」

栃木県吹奏楽連盟副理事長 小川 光正

皆さんこんにちは!

この「すいそう太郎」が皆さんの手元に届く頃はアンコンも終わり、今年度の活動も一段落し、ほっと一息といったところででしょうか (^_^) いやいや、来年度に向けての構想を練っており、一休みしているところではないという方々もおられるかもしれませんね、すいません、失礼いたしました m(_ _)m

ところで、皆さんは、どうして今の楽器を始めることになったのでしょうか?

トランペットやフルートは華やかだし目立ち、やってみたい!先輩に誘われた(あるいは顧問の先生に指定された、決められた!)とか「君は身体が大きいから...?!」、など様々な理由があつてのことでしょうね (^_^;)

さて、私はというと、中学校に入学するときに先輩に「おまえはトロンボーンだと言われて」否も応もなくトロンボーンになり(実は当時の私の中学校では、小学校で、鼓笛隊長をやったヤツは(私はその鼓笛隊長をやっていました!))、中学に来たら吹奏楽部に入り、トロンボーンをやるんだという変な伝統?? が5~6年以上続いていたので、そのようなことになり、以来今に至るまで約50年同じ楽器を続けています。(その間全然上手くなってませんが (^_^;))

そんな私ですが、なぜ50年も同じ楽器を続けてこられたかという、それは、中学校の時のある思い出があったからです。その思い出というのは、私が、中2の時の課題曲(兼田敏作曲のバンドのための寓話)の中で、マーチの中でよくあるような、チューバとトロンボーンでの「ブンチャッ・ブンチャッ」というフレーズが曲中にあり、(その曲中では一見五拍子というか、ヘミオラ風のリズムがあつたのですが、何を考えたのか、当時の顧問の先生(第2代栃木県吹連理事長の手塚豊先生)から、トロンボーンとチューバパートだけ取り出しで、やってみろ!と言われ、やったところ、見事に縦線も横線もそろい、かつ音楽の推進力もあり(ほんとにかよ?!)自分たちも「こりゃ、こでらんね」という、すごくやって楽しいし、これが永遠に続いたらいいのと思えるほどで、それが忘れられず、もう一度あの快感を味わってみたいという思いに駆られたため50年もやってこられたのです。あれっ、これって「アンサンブルの楽しみ、そのものですよね!」

皆さんも、何かしらの楽しみ(いい音で楽器を鳴らすことができた、ソロを褒められた、あるいは楽器を通しての友達との交流、など)があるから、楽器を!音楽を!続けていられるのでしょうか。

多分それは、これからの皆さんの人生の中で、必ず、役に立つ、あるいは潤(うるお)いをもたらすものであることは間違いありません。

私も、長く音楽を続けてきたおかげで、多くの素晴らしい音楽と出会い多くの素晴らしい人たちと出会い、豊かな人生といえるかどうかはわかりませんが、楽しく生きてこられました (^_^) v

皆さんも、これからも音楽を楽しみ、続けていってください。

何かいいことがありますよ (^_^) /
きつと? たぶん?



1 第24回 東関東小学生バンドフェスティバル（ステージ部門）に参加しての感想

令和7年9月14日(日) ステージ部門 会場：宇都宮市文化会館

「東関東大会で思ったこと」

真岡市立大内東小学校 4年 梁木 智矢

合同バンドで練習して半年、東関東バンドフェスティバルに出場するとは、夢にも思っていませんでした。

兄が益子小との合同バンドに参加していたので、自然とほくも参加することになりました。今年は大内東小からほく一人だったのでとても不安でした。でも、益子小のバンドのみんなや、先生方、保ご者のみなさまが温かくむかえてくれたので、すぐに仲間に入ることができました。

ふだんの練習では、きそ練習をやったり、リズムをとれるように歩いたりしていました。トロンボーンも音が良くなるように、こつこつ何回も何回もくり返し練習しました。

みんなでホールニューワールドを歌い、むずかしい英語も夏休みに一生けんめい練習してうたえるようになりました。

ダンスの練習では、みんなで決めポーズやステップなどふりつけをかくにんしながら、アラジンのジーニーのように楽しさを表現できたらよいと考えて、おどりました。

大会本番の日は、きんちょうしたけれど、ぶ台に立ち、音を出したしゅん間にきんちょうがなくなり、ぎやくにワクワクする気持ちになりました。あつという間にえんそうが終わり、力を出し切れたと感じました。

大会の結果は、バスの中でみんなで聞きました。金しょうをとれてすごくうれしい気持ちと、金しょうをとれたのに全国大会に出られないくやしい気持ちになりました。でも、この気持ちを仲間といっしょに味わうことができたのが、一番の思い出です。

これからも、合同バンドで活動できることに感しゃし、こつこつと練習を重ね、みんなで最高の音楽を楽しんでいきたいと思います。



2 第31回東関東吹奏楽コンクールに参加しての感想

令和7年9月6日(土)・7日(日) 高校生の部A部門・中学生の部A部門 会場：カルッツかわさき

9月13日(土)・14日(日) 高校生の部B部門・小学生BF・小学生の部 会場：宇都宮市文化会館

9月20日(土)・21日(日) 中学生の部B部門・職場一般の部・大学の部 会場：水戸市民会館

「覚悟と情熱を音にのせて」

真岡市立真岡中学校 部長 鯨 絢音

私たちは、東関東吹奏楽コンクールに出場し『歌劇「トスカ」より』を演奏しました。顧問の先生の情熱と、先輩方の意思を継ぎながら、毎年より高い目標を掲げてきました。今年度は、「覚悟～奏で合う情熱、響き渡る未来～」というスローガンのもと、東日本大会出場を目標に部員一人一人が強い覚悟と情熱をもって本大会に臨みました。



本大会に至るまでの道のりは決して簡単なものではなく、目標に対する意識の違いから練習の方向性や考え方で何度も話し合いを重ねてきました。その中で互いに思いを伝え合い、ぶつかり合いながらも、少しずつ同じ方向を向いて進むことができるようになりました。部長として私は「部のためにできることはすべてやる」と決め、時間も気力も全て部活動に捧げてきました。

本番当日、緊張感に包まれたステージで私たちはこれまで積み上げてきた思いを胸に、一音一音に心を込めて演奏しました。

また、私たちは部員だけでここまで活動できたわけではありません。地域の楽器店の方々の支えや、OB・OGの皆さんの応援に加え、日々支えてくださった保護者の方々、そして常に導いてくださった顧問の先生方の存在があったからこそ、私たちは音楽と真剣に向き合い、精一杯頑張れる環境の中で活動することができました。その一つ一つの支えが私たちの大きな力となって背中を押してくれました。

結果は二年連続で金賞を受賞することができましたが、目標であった東日本大会出場を達成することはできませんでした。しかし、このメンバーで音楽を作り、このステージに立てたことに心から幸せを感じています。悔しさもありますが、それ以上に仲間とともに積み上げてきた時間や経験は、これからの人生において大きな財産になると信じています。この大会で得たものを胸に今後も音楽と真剣に向き合っていきます。

「東関東吹奏楽コンクールに参加して」

宇都宮大学共同教育学部附属中学校 部長 3年 伴 絵花

代表選考会の表彰式。緊張した空気が流れる中、東関東大会に進める学校の発表が始まりました。一つまた一つと学校名が呼ばれる中、私たち宇都宮大学共同教育学部附属中学校の名前が発表されました。あの瞬間に会場内に響き渡る部員たちの歓声、感動は今でも忘れられません。同時に、県代表として東関東大会に出場するという事に身が引き締まりました。そして東関東大会に向けてより一層、厳しい練習に励み始めました。

妥協をせず部員同士で支え合いながら辛い練習も乗り越え、遂に東関東大会当日を迎えました。

会場へ向かうバスの中では、最後の掛け声が始まりました。男子副部長による「絶対金賞取るぞー!」の掛け声と共に全員が拳をあげて「おー!」と叫びいつもの笑顔が戻りました。

大きな会場を目の前にした時、「今からこの会場に音を響かせるのか」と改めて身が引き締まりました。会場には沢山の人が溢れていました。慣れない会場で困惑しましたが「いつも通り」をモットーにリハーサル室で最後の練習を終えました。舞台袖では緊張や不安で頭が真っ白になってしまいましたが、顧問の藤沼先生の「よく頑張ってきたね。今までの自分を信じて。」という一言で前向きになり、本番は堂々と私たちが『Trittico』を響かせることが出来ました。演奏後は全員、最高の笑顔で写真を撮ることが出来ました。結果は金賞でしたが、東日本大会には一步届かず、私たちの夏はここで終わってしまいました。悔しさでいっぱいでしたが全てを出し切ることが出来たので後悔はありません。この日は最高の1日になりました。

私が最後まで吹奏楽部をやり切ることが出来たのは保護者の皆様、顧問の先生方のおかげです。本当にありがとうございました。そして、最後まで目標に向かって走り続けてくれた仲間たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。この三年間は一生忘れることのない大切な宝物です。このような大会を運営して下さった吹奏楽連盟の皆様、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。



「東関東吹奏楽コンクールに参加して」

栃木県立小山城南高等学校 3年 部長 宇賀神 莉心

「東関東大会で悔いのない演奏をしたい」そのような目標を胸に熱く持っていたものの・・・その間、栃木県マーチングコンテストにも出場し、コンクールの曲からは1ヶ月間離れていました。そしてコンテストが明け、1ヶ月ぶりの合奏での絶望的な演奏は今でも忘れられません。マーチングがあったからこそ学べたこと、スタミナが増したことは良かったと思います。しかし、マーチングモードからコンクールモードに戻すまでには苦労が多く、それぞれが工夫を重ねました。



当日、東関東大会の会場では、どの学校もレベルが高く圧倒されました。リハ室での部員の表情は、緊張と不安が込み上げているように感じ、少し焦りを感じました。ですが、リハ室を出る前に全員で目標を大声で叫びました。すると皆の表情が明るくなり、安心してステージに向かうことができました。本番、すべてがうまくいったわけではありませんでしたが、楽しく舞台に立ち、今までやってきたものを出し切り、聴いてくださる方々にいい音楽を届けたい、という私たちの気持ちは達成されたように思います。コーダの部分では、このメンバーで全力で音楽に取り組んできたこと、全力で音楽を楽しんできたこと、今までの日々が頭を駆け巡り、締めくくりのC-durの和音は、今までの吹奏楽人生で1番の思い出のハーモニーになりました。

結果は、銀賞でした。表彰式の舞台からは、涙する部員の姿が見えました。本当は笑顔を見たかったです。しかし、ここで得た経験は、今後の取り組みの糧になることは間違いありません。このメンバーで東関東大会に出場できて良かったとあらためて思いました。

「東関東吹奏楽コンクールに参加して」

宇都宮市立陽南中学校 部長 3年 片山 愛葉

東関東吹奏楽コンクールは、私たちが目標にしてきた舞台であり、出場できたことは念願が叶った貴重な機会でした。日々の練習では、思うようにいかないことも多く何度も壁にぶつかりましたが、この舞台に部員全員で立つという目標があったからこそ、仲間と支え合いながら努力を続けることができました。本番では、とても緊張しましたが、この貴重な機会を大切に、これまで積み重ねてきた成果を精一杯表現することができたと思います。結果だけでなく、この舞台を目指して過ごした時間や経験そのものが、私たちにとって大きな宝物になりました。



顧問 森下 円佳

本校は、近隣の小学校に管楽器のバンド等がないため全員が初心者で入部してきます。音符がまったく読めない生徒、吹奏楽の演奏を始めて聴く生徒等、5月にゼロスタートする1年生です。そんな1年生も含め、部員全員でコンクールのステージに立つのが例年です。コンクールまでの3カ月、限られた時間で助け合いながら課題曲に自由曲と2曲を仕上げていくことは容易ではありません。不安になりながらも、目標に向けて何度

も繰り返し練習に取り組む生徒たちに、私も勇気をもらい同じ気持ちで一緒に吹奏楽青春しています。今年度自由曲に選んだ、樽屋雅徳さんの「カタリナの神秘の結婚2023年版」は、私たち吹奏楽部員にとって、かなり背伸びをした曲でしたが、それでも諦めずに納得がいくまで仕上げることができました。

この3年間陽南中学校吹奏楽部の部員だったからこそ得られたこと、様々な経験を胸に、それぞれの道を歩んでいってほしいです。

「東関東吹奏楽コンクールに出場して」 作新学院高等学校 部長 3年 齋藤 心和

私たちは第31回東関東吹奏楽コンクール高校A部門において金賞を受賞することができました。東関東という大きな舞台に立てたことは非常に貴重な経験となりました。県大会とは異なる緊張感の中でこれまで積み重ねてきた練習の成果を出し切る、限られた演奏時間に音楽を集約するこ



との難しさ、私たちの全てが詰まった12分間に疲労と愛しさを改めて感じる高校生活最後の大会となりました。

今年の自由曲は伊藤康英作曲「ピース、ピースと鳥たちは歌う」を取り上げました。この作品はチェロ奏者のパブロ・カザルスが国連にてカタロニア民謡『鳥の歌』を演奏し平和への願いをスピーチしたことが題材となっています。この民謡のモチーフが全編を通して散りばめられ世界平和への願いの強さを楽譜からも読み取ることができ、配布された直後は非常にメッセージ性の強い作品に挑戦することになるなどという印象でしたが、自分たちなりの解釈で深掘りしていくことで常に聴衆を意識した音楽を構築していく重要性を再認識することができました。本番では夢中で音楽に没頭しました。全国大会へは届きませんでしたが皆と重ねてきた音楽でこの舞台に挑戦できたことに大きな意味があったと感じています。

また全日本吹奏楽コンクールが宇都宮で開催され運営補助員として携わる機会をいただきました。自分たちの音楽に自信を持って表現する高校生の姿が強く印象に残っています。「あの舞台に立ちたい」という思いは後輩たちに託すことにします。

出場するにあたり、家族以上に一緒に時間を過ごした指揮者である大貫先生や仲間たち、日頃から私たちの活動を支え自分のことのように喜び、悔しがってくれた三橋先生・野澤先生、応援しサポートしてくれた家族・講師の先生方、支えてくださった全ての方々へ感謝いたします。

今後は後輩たちの活躍を楽しみに、OB 楽団である作新楽音会に所属し恩返しできるような音楽活動をしていきたいと思えます。

「第31回東関東吹奏楽コンクールに参加して」

矢板ウインドオーケストラ 事務局長 岡田 徹

当楽団は1982年に発足以来、皆様の温かいご支援とご指導に支えられ、本年で44年目を迎えることができました。これまでに年2回の定期演奏会、コンクールの参加、そして地域活動を続けてこられたことは、ひとえに関係各位の多大なるご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。

私たち一般の吹奏楽団（の運営事務局）にとってコンクールに出場することは、限られた期間で課題曲と自由曲の2曲を仕上げるため、練習場所の確保や楽器の移動など、たくさんの制約のある非常にストレスのかかる行事であります。ですが、団員にとっては、音楽に対する理解を深めることができる、非常に貴重な機会です。

本年度は、水戸市民会館にて開催されました第31回東関東吹奏楽コンクールに参加いたしました。出演順が9番ということもあり、当日の練習はできません。団員の中には前日から水戸市内に宿泊したメンバーもいたようですが、私は当日の朝2時間ほどかけて移動しました。2023年にオープンしたばかりのとても素晴らし

いホールで演奏でき、とても良い経験になりました。演奏の内容は特に大きな事故もなく、普段の練習の成果は出せたのではないのでしょうか。結果は金賞をいただくことができました。

大人になると、演奏技術の向上は難しいですが、少しでも現状維持し、大人ならではの味のある、趣味的の高い音楽を求めて今後とも精進してまいりたいと思います。

3 第31回 東関東マーチングコンテストに参加しての感想

令和7年10月5日(土) A部門 (中学生の部・高校生以上の部) 会場：ひたちなか市総合運動公園総合体育館

B部門 (中学生の部・高校生以上の部)

※第24回東関東小学生バンドフェスティバル (フロア部門) も同日開催

「壁を乗り越えて」

壬生町立壬生中学校 顧問 吉川 宗快

私たち壬生町立壬生中学校吹奏楽部は、令和7年10月5日、茨城県ひたちなか市総合運動公園総合体育館にて行われた、第31回東関東マーチングコンテストに参加させていただきました。大会の日までに、私たちにはさまざまな壁がありました。しかし生徒たちは、それをひとつひとつ乗り越え、大きく成長することができました。



一つ目の壁はリズムです。演奏曲の中に、『MISSION : IMPOSSIBLE』のテーマがありました。この曲は5拍子となっており、演奏しながら歩くことに生徒たちは苦勞していました。ふだんは5mを8歩で歩く訓練をしていますが、この曲では5mを10歩で移動しなければなりません。3年生が主体となり、動きはもちろんのこと、横一列で綺麗に動くことができているかを、念入りに確認するなど努力を重ねる姿がありました。

二つ目の壁は暑さです。本校ではマーチング練習を基本的に屋外で行います。令和7年の夏も異常な暑さが続き、体調管理と練習時間の確保をどのように両立させるかを考える日々が続きました。暑さを少しでも回避するために、生徒たちは早朝から練習したり、保護者の方に冷たい飲み物やアイスを差し入れていただいたりしながら、なんとか熱中症の生徒を出すことなく、乗り切ることができました。

さまざまな壁を乗り越えて参加させていただいた本大会は、銅賞という結果でした。まだまだ改善点があったことは否めません。しかし大会を終え、改めて生徒たちはよく頑張ったな、成長したなと思え、感慨深いものがありました。そして次年度のコンテストに向けて、ますます頑張っていこうと決意を新たにしました。

末筆ながら、本大会に向けてご助力いただきました県吹奏楽連盟の皆様、保護者の皆様、学校関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

4 第67回 栃木県アンサンブルコンテストに参加しての感想

令和7年12月26日(土) 中学生の部 会場：栃木県教育会館

12月27日(日) 小学生の部・高等学校の部・大学の部・職場一般の部

「栃木県アンサンブルコンテストに参加して」

宇都宮市立国本中学校 2年 増田 誠明

打楽器三重奏で「トリオ・パー・ウノ」を演奏し、金賞をいただくことができました。「3人が一つに」という名の通り、3人で息を合わせながら演奏しなければならないのがこの曲の特徴です。リズムを揃えるために呼

吸を意識したり、音色や音量を揃えるためにスティックを上げる高さや角度まで、1つの音楽に聞こえるようしっかり合わせました。それが今回の結果に繋がったと感じています。

本番は緊張しましたが、3人のビートが噛み合っており、今までで一番楽しめたと思います。そして表彰式のときに、金賞と聞いた時はとても嬉しかったです。今まで、この3人で頑張ることができて本当によかったです。そしてこれからも頑張っていきたいと思います。



1年 君島 萌香

県大会に出られると知った瞬間は嬉しすぎて飛び上がりそうになりました。練習を積み重ねていき、本番がきて無事に演奏を終えました。代表の先輩が表彰状を受けとる番がきて、司会の方が「ゴールド金賞」と言ったときは、驚きと嬉しさが同時に込み上げてきて、今まで努力してきた良かったと思いました。今回アンコンに出て、私は努力することの大切さを知ることができました。この貴重な経験を、これからのことに活かしていきたいです。

1年 吉沢 瑛太

県大会という舞台に立ち、仲間との協力、そして大切さを改めて実感しました。僕は、会場に一步踏み出したときに、何ともいえない緊張感と不安で一気に包まれ、正直うまくいく自信がありませんでした。ですが、演奏を始めたら、一気に不安が解消され、練習の成果を出し切ることができたと思います。結果は、東関東出場ならずという惜しい結果に終わってしまいましたが、これからはこの経験を今後の演奏や日々の練習に活かしていきたいと思います。

顧問 菊地 美德

今回の県大会出場を経て、生徒たちはとても大きく成長した。音楽に向き合う姿勢や、仲間と協力してひとつのことを成し遂げる力を間近で見せてくれた。今後も夏のコンクールに向けて、生徒たちとともに走り抜きたい。

「挑戦できた喜び」

宇都宮市立田原中学校 副部長 2年 猪瀬 誠心

「37番 宇都宮市立田原中学校 サクソフォン3重奏」

本校としては初めての県アンサンブルコンテストの表彰式で、なんと東関東大会への出場が決まりました。その瞬間信じられない思いと、これまでの努力が実った喜びで胸が一杯になりました。

今回、私達サクソフォン3重奏が演奏したのは、清水大輔先生作曲の「Empathy」です。この曲に臨むにあたり、特に「イメージの共有」を大切にしてきました。「ここはどんな情景なのか」「この場面ではどんな展開をたどるのだろう」といった、曲の細かなところまでイメージをすり合わせました。そうすることで、三人のそれぞれの音の良さを存分に発揮しながらも、互いの音を引き立て合い、一つの豊かな響きへと溶け合っていく演奏を目指しました。県大会の会場である、栃木県教育会館は地区大会でも演奏した思い出のある舞台です。「前回の私達よりもっと良い響きを届けたい!」「今まで三人で練習してきた成果を全て出し切りたい!」という強い向上心を持って本番に挑み、自分たちの目指す響きを形にすることができました。

今回の結果に満足することなく、今回の経験で得た課題を一つひとつクリアし、来年度に行われる吹奏楽コンクールに向けて日々進歩していきたいです。

顧問の佐藤先生をはじめ、支えてくださった部員のみんな、保護者の皆様、応援して下さった方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

「アンサンブルから学んだこと」

栃木県立矢板東高等学校 2年 武村 香

「アンサンブルで大切なことは何よりも思いやりです。」これは、私が臨時で参加した吹奏楽団に特別講師としていらした先生の言葉です。正直、この言葉について最初は何とも思いませんでした。私達は全員学年が違い、吹き方ももちろん違う。ですが、私達は前向きに励ましあいながら頑張れるような絆が深い三人組です。ですから、思いやりはもともとあるという確信がありました。私

達はとても挑戦的な選曲しましたが、チームワークが良いからいける!とっていました。しかし、初めて気持ちのすれ違いが起きました。目標がずれて、怒ったり泣いたり、もう無理だとも何度も思いました。けれど、もう一度頑張ろうと、立ち直ることができました。上下関係を気にせず指摘もし、尊重しあえるようなチームワークが次第に生まれてきました。ここには新たにアンサンブルに必要な本当の思いやりが生まれたのではないかと思います。県大会本番当日。私達は「気楽に楽しんで」という気持ちで本番に臨みました。私はフルートを始めて六年以上経ちます。私は昔から緊張しやすくどんな大会であってもすごく緊張してしまいます。ですが今回は違いました。会場すべてが自分たちだけの空間になったような気分でした。曲の最後の特殊奏法が重なり合うところではもう終わってしまうのかと、少し寂しかったです。終わった時、いつもなら「やりきった」と思うのですが今回は「楽しかった」と心の底から思いました。今まで吹奏楽をやってきた中で、いや、人生で一番楽しかったと思える瞬間だったと思います。結果は金賞。東関東には進めませんでしたが大事なのは結果ではありません。今は思いやりが大切という意味がとてもよくわかります。これからも続けていく中で思いやりを大切にしていきたいです。そして、メンバーの二人へ。二人と頑張れたからいい経験と最高の思い出を作ることができました。一緒に出てくれてありがとう。



「栃木県アンサンブルコンテストに参加して」

帝京大学吹奏楽同好会 梶谷 正行

初めまして、帝京大学吹奏楽同好会 Zizz (ジズ) 顧問の梶谷と申します。本職は生物の教員ですが、中学・高校時代は吹奏楽部員でした。本学の吹奏楽同好会の部員数は毎年10人前後で、その中でも現在日常的に活動しているのは、先日のアンコンに出場した4人だけという小さな同好会です。実は一度消滅したのですが、2008年に吹奏学経験者がたくさん入学し、経験者であった私を顧問に担ぎ出して復活し、現在に至っています。



このところ学祭でのステージのみが発表の場(写真)でしたが、昨年(2025年)、学生が自発的に「外に出てみよう」と言い出し、久々にコンクールに出場いたしました。理工系の学生がメインですので、学生実習やアルバイトとの時間調整が難しく、全員揃っての練習が少ない中、なんとか出演できたというのが正直なところです。また他の団体の演奏から刺激を受け、「音楽っていいな」と思ったようです。

ところで私事で恐縮ですが、中学2年（1969年）までが順位制、3年の時から金銀銅賞制に変わりましたので、両制度を体験した希少種(?)の一人です。当時の演奏を今ではネットでも聴くことができますが、聴くたびにセピア色になったシーンがいろいろ蘇ります。また、2026年3月に定年退職しますが、最後の2年間、宇都宮で全国大会が開催され、後輩たちの出場をサポートできたことも幸せでした。指導者や保護者はもちろん、当時も多くの方々に支えられていた活動だったと改めて感じました。

私の退職後は、現役のバイオリン奏者でもある教員が3代目顧問に就任します。また、今回のアンコン参加を機に部員たちは「もっと合奏を楽しみたい」と申しておりました。機会があれば「一緒にやりませんか」と声をかけていただければ幸いです。新生 Zizz を今後もよろしくお願ひ申し上げます。

編集後記

栃木県吹奏楽連盟副理事長・広報部長 今泉 剛

数々の大会で、多くの団体が活躍した令和7年度となりました。原稿依頼は、連続とならないようにお願いをしているところですが、依頼先を選ぶことがたいへんだと感じる年度でした。

各顧問の皆さんは、大会運営等で他校・他団体の指導者とお会いになる際、日頃の悩み（部活動経営・団の運営）など打ち明けたり、練習方法について質問したりしてコミュニケーションを図っておられますか？アンサンブルコンテストでは、「退部によって出場を辞退する」ということが報告されました。部員・団員にとって意義のある時間、楽しい時間を提供するためにも、私たち指導者の情報交換は大切であると思います。私たち顧問・指導者同士の連携が求められていると感じました。

《お願い》 原稿の執筆依頼が届きましたら、お忙しいとは思いますが是非書きいただき、期限内にお送りくださいますようお願いいたします。

